

甘樫丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第 171 次調査)記者発表資料

2012年3月2日

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

所在地 : 奈良県高市郡明日香村大字川原地先(国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区内)

調査主体 : 奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査面積 : 880 m²

調査期間 : 2011年9月22日～2012年3月(継続中)

※現地見学会のお知らせ

2012年3月4日(日) 11:00～15:00 小雨決行

説明は、12:00と14:00の2回、おこなう予定です。

1 甘樫丘東麓遺跡の調査

甘樫丘は、飛鳥川の西岸に位置する標高 145m ほどの丘陵である。丘陵は多数の谷が入り込む複雑な地形を呈し、今回の調査地も南東に開く谷の一つにあたる。『日本書紀』には、皇極天皇 3 年(644)に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が甘樫丘に営まれたことが記されている。

甘樫丘東麓遺跡では小規模なものも含め、これまで合計 8 回の発掘調査をおこなっている。第 71-11 次(1993 年度)から第 141 次(2005 年度)までは、国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区の整備にともない、遺跡の有無や状況を確認するための発掘調査を、第 146 次(2006 年度)以降は、国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所の協力を得て、遺跡の内容・性格を解明するための計画的な発掘調査をおこなっている。

第 75-2 次(1994 年度)では、谷の入口付近、今回の調査区のすぐ南側で発掘調査をおこない、7 世紀中頃の焼土層を確認し、多量の土器片・焼けた壁土・炭化木材などが出土した。第 161 次(2009 年度)では、谷の入口へと下がっていく部分で、被熱して硬化した面、炭・焼けた壁土を多量に含む土層、石敷等を確認し、北側の丘陵尾根中腹で柱列を検出した。第 146 次(2006 年度)・第 157 次(2008 年度)では、7 世紀前半から中頃までの石垣を長さ約 34m にわたり確認した。これまで谷全体で建物・塀等が検出されており、7 世紀から 8 世紀初頭にかけて、谷を大規模に造成し、土地利用を行っている様相が明らかとなっている。

これまでの調査により、3 時期の遺構変遷が把握されている。Ⅰ期が 7 世紀前半から中頃まで、Ⅱ期が 7 世紀後半、Ⅲ期が 7 世紀末から 8 世紀初頃までにあたる。

今回の調査は、丘陵裾の平坦部における遺構の広がり、第 161 次(2009 年度)の調査で検出した石敷や硬化面の全容解明、谷入り口付近の土地利用の様相の解明を主な目的としている。調査は 2011 年 9 月 22 日から開始し、現在も継続中である。

2 調査成果

(1) 調査区の概況

今回の調査区は、北半の丘陵裾部が後世の耕作によって地山まで大きく削られ、耕作ともなう溝が残る。調査区西南部は、南東に開く谷の北側斜面に当たり、南へと下がついていく地形であるが、この斜面を削って2段の平坦面を造成している。

以下、まず、主な遺構が所在する谷の概況を説明し、次に2段の平坦面の遺構を上段平坦面と下段平坦面に分けて説明し、最後に丘陵裾部の遺構を説明する。

谷 南東に向かって開く谷。調査区西南部はその北斜面に当たる。南に下がる斜面に対し、地山を人工的に削って造成し、上下2段の平坦面を作り出す。これまでの調査成果から、この谷の造成は、本調査区北西側（第157次調査区）で検出された石垣（SX100、I期：7世紀前半から中頃まで）とほぼ同時期か、わずかに遅れる時期とみられる。

上段平坦面は、基盤土の上面に黄色の粘質土を貼って整地する。上段平坦面の西半を中心に、これらの整地土の上に、炭片や焼けた壁土が多量に混じった土（以下、炭混土と表記）が、厚いところで20cm程度堆積する。さらにその上層には、谷を一気に埋め立てた土（以下、谷埋立て土と表記）が厚さ1.5m程度堆積する。この炭混土及び谷埋立て土からは、飛鳥Iの新しい段階（7世紀中頃）およびそれ以前の土器が出土しており、以下に説明する上・下段平坦面の遺構は、全てこの時期以前、従来の時期変遷のI期に該当する。

(2) 上段平坦面の遺構

石敷溝 調査区西南辺で検出した、北西-南東方向の溝。溝は2時期に分かれ、底に直径10cm以下の石を敷く溝（幅50cm以上）を南へ拡張し、底に直径10~15cm程度の石を敷き直している（幅約140cm）。

石敷 調査区西南部のほぼ中央で検出した、直径10cm程度の石を並べた遺構。東西約2m、南北約1.4mの範囲で、灰色砂層上に石が残存している。石の上面には粉炭が薄く堆積し、その上層に炭混土が堆積する。

被熱面 調査区西南部の東半で、熱を受けて赤色化ないし黒色化した整地面。東西約2.5m、南北約4mの範囲に点在する。

硬化面1 高熱を受けて硬化した面が大きく2カ所に残存し、そのうちの東側に当たる。北東-南西に主軸をもつ幅2m程度の細長い範囲に残る。北東が若干高く、南西に向けて徐々に下がる。残存長は5.5m程度である。主に灰色ないし黒色、一部橙色から赤色を呈し、残存状態がよい部分では、硬く焼け縮まった層が厚さ3cm程度残る。

硬化面1は石敷が敷かれた灰色砂層の上層にあり、石敷をともなう施設を壊して設けられたものとみられる。

硬化面2 硬化面1の北西側に位置する、もう一方の硬化面。硬化面1と比べて残存状態が悪く、橙色の薄い硬化面が部分的に残る。本来は、硬化面1とほぼ平行する主軸をもち、長さ4m以上の範囲に存在したと思われる。

方形遺構1 調査区西南部の東辺付近、焼土面の東側に接する一辺80cm程度の方形の遺構。砂と黄色の粘質土を積み重ね、上面に直径10~15cm程度の石がまばらに残る。その上には、炭片や焼けた壁土が混じった土が堆積する。東辺に幅30cm程度の溝が付属する。

方形遺構 2 方形遺構 1 の西側にある、一辺 80 cm 程度の方形の遺構。南辺に幅 40 cm 程度の溝が付属する。

炭入り土坑 調査区西南部の東壁にかかる南北幅 80 cm 程度の土坑。埋土に炭が混じる。

(3) 下段平坦面の遺構

建物 1 桁行 2 間以上、梁行 2 間の掘立柱建物。柱間は桁行約 2.4m、梁行約 1.8m。西妻から 2 間分を検出したが、さらに南東の調査区外に延びる可能性がある。建物内に黄白色の粘質土を敷く。

炭だまり 調査区西南隅の炭堆積。上段平坦面の西半を中心に堆積する炭混土より下層に堆積している。

(4) 丘陵裾部の遺構

竪穴建物 調査区北部にある竪穴建物。長辺約 5 m、短辺約 3 m の隅丸長方形を呈する。出土遺物から、従来の時期変遷の I 期（7 世紀前半から中頃まで）に該当する。

柱列 1 調査区やや西寄り、谷の落ち際にある「L」字状に折れる柱列。東西 4 間、南北 1 間分を確認した。柱間は約 1.5m。調査区西南部の施設の目隠し塀であった可能性がある。

柱列 2 調査区ほぼ中央にある「T」ないし「十」字状に交差する柱列。南北 3 間、東西 3 間分を確認した。柱間は南北が約 3 m、東西が約 2.4m。南北 3 間は、柱穴を北へずらして建て替えている。

柱列 3 調査区ほぼ中央にあり、柱列 2 と交差する柱列。東西 3 間分を確認した。柱間は約 2 m。

(5) 出土遺物

炭混土より焼けた壁土・土器・炭片・炭化材・木片などが、谷埋立て土より土器・輪羽口・鉄滓などが出土している。土器は、飛鳥 I の新しい段階（7 世紀中頃）のものが多く、それ以前のものを少量含む。

3 まとめ

- 上段平坦面に広がる硬化面・被熱面・方形遺構・石敷は、いずれも残存状態が悪く、全体の構造・性格は不明である。ただし、硬化面・被熱面は高熱を受けたことを示している。
- 硬化面・被熱面・方形遺構は、火を用いる何らかの生産に関わる施設、例えば窯・炉の床面や地下構造などの一部である可能性が考えられる。その場合、壁体は完全に破壊され、全く残っていないことになる。ただし、製品と確定できるものが出土しておらず、何を生産していたかは不明である。
- 今回の調査では、7 世紀前半から中頃までに、これまでの甘樫丘東麓遺跡の調査で確認していた、石垣・建物・塀などが展開する部分とは性格の異なる場、一種の工房的な施設の一部が、谷入り口部付近に存在することが明らかとなった。甘樫丘東麓遺跡の全体像を把握する上で、貴重な成果である。

